

第3部：ディスカッション

益田：まず佐藤さんにおたずねしたいのですが、先ほどのお三方のプレゼンテーションから、かなり綿密な、詳細な調査をしていらっしゃるように思いましたが、だいたい何人くらいで、あるいはどのくらいの時間をかけて取り組まれてきたプロジェクトなんですか？

佐藤：デザインリーグには会員としていろいろな団体が所属していて、その団体の方々を含めるとそれこそ数百人ということになるのですが、常々コアとして参加してるのは30人くらいです。いざこういうプロジェクトをやるとなると、最大でも50名くらいが動いているわけですね。今回のテーマは、まず夏から秋にかけて2週間に一度くらいのペースで勉強会をやりました。その後に大名の一軒家のギャラリーのようなスペースを借りまして、住民の方々に来ていただき、1週間ぶっ通しでワークショップを開催しました。さらに2、3ヶ月間、提案の内容をまとめる作業をやって、ここに辿り着いたと。その間には、行政などさまざまな立場の方々と意見交換をしたり、大学のそれぞれ専門の先生へのヒアリングも実施しました。我々は必ずしも医療の専門でも、地質屋でも、防災の専門家でもない。その意味では、デザイナーという視点ですから偏っていると思います。しかし福岡デザインリーグの本来の主旨が、一人のデザイナーではできないことをみんなで集まって何かやれないかということでしたので、今回このような公共のテーマをとりあげ、良かったと思っています。

益田：今後の活動はどのようにお考えになっているのですか？

定村：来年度に計上した予算で、今回のプロジェクトの報告書をまずつくります。さらにどのプロジェクトが一番リアリティが高いか、優先順位を決めて、実現にむけて動いていきたいと考えています。避難マップなどは実際に行政が事業としてやっていますので、このアイデアをぶつけて実現していくことも可能だと思うんですね。それから自動販売機も、この事業を手がけている企業が大名地区でリサーチに入って、できるのではないかと手応えあるところまでできています。提案だけで終わっては何にもならないわけですから、実際に実現していこうと。

益田：今回の発表の中で、「災害弱者」という言葉と概念についてお話がありました。我々には耳新しく、もっともっと知らなければいけないことだと思うんですが、あのへんはどういう立場であなたが定義していらっしゃるのでしょうか。



椋本：「災害弱者」というのは国のフォーマットの中にも出てきています。

障害者でもいろんな障害者があります。行政や自治会の中でも、どういう人がどういうことで困っているのかということは本当は分かっているんですが、それを公開できない、いわゆる情報公開の壁があるようです。ですから日頃のコミュニケーションがいかに大切かということだろうと思います。

益田：そのへんは非常にナイーブですね。「災害弱者」という言葉を聞いて真っ先に思い浮かべたのは、例えばニューオリンズのハリケーンのことでした。富める者とそうでない者、この差は非常に大きいし、それがまた住む場所で仕分けられているということもありますよ。オフィシャルに出てくるカテゴリーとは別に、そのへんが実は非常に大きなファクターだけれども、なかなか言えない部分なんでしょうね。

定村：そうですね。大名地区にも民生委員が地区にいらっしゃいます。その方々が、その地区の老人や社会的に立場の弱い人などのケアをしているわけですね。普段は、一人で50人ぐらいをみていらっしゃるんですよ。しかしいざとなったときに、それだけの人数のケアができるわけがない。しかしみんなで手分けしてケアをしましょうということになっても、そのリストは他人には見せられないんです。民生委員だけしか持てない。そのへんにちょっと壁があるようです。

益田：災害が発生したときに、ボランティアの方がたくさんその場所に入るわけですが、ボランティアに対して十分な情報開示がされていなかったり、あるいは管理ができないということもあると思いますね。もっと社会が緩やかになって、原則論とは別に、ある程度の情報をもって動ける人たちが中間に育ってこない、いざという時になかなか難しい状況だと思います。

どこの地域でもそれぞれに特殊な事情を抱えているわけですが、例えばそこから我々が学び得ること、普遍的なことというか、共通している要素というのは例えばどんなことがあるのでしょうか？

佐藤：今回の震災で最も被害を受けたのが玄海島という漁村部や、福岡の郊外の北崎という農村だったんですね。例えば玄海島の住宅はほとんど斜面地に建っているんですが、ほぼ壊滅的な打撃を受けています。これらはすべて現法では違法建築状態でした。隣の住宅に行くのに中を通過して、家賃を払って行かなければならぬ。あるいは敷地が接道してないとか、現行の建築基準法上ではぜったいに建たないような住宅地なんです。ところがこれが全壊にも関わらず、死亡者が一人も出なかった。日頃から声かけをしていて、地震の発生直後に誰がいないかということを知りながらいち早く理解していたというんですね。それは玄海島という特殊な状況なのかもしれませんが、まったく同じようなことが北崎という農村でも起こっているわけです。災害が起こったあとの復興計画では、県が住宅を建てます、あるいは市が恒久的な住宅を建てる。現行の法規の中で斜面をかけるのぼるような道路をつくらなければいけない。そのような方法ではたして昔のような状況が再現できるか。これは神戸のときも同じような問題があったと思うんです。「復興」という名の元の破壊。復興したとたんにかつてのコミュニティがほとんど壊滅状態になってしまう。どちらが豊かであるということなのか。それを今回の場合も強く感じました。

益田：それぞれに非常に特殊な事情というものを持っている。対策をひとからげにはできないということだと思います。我々が企業に何かを期待していこうと考えたきっかけは、新潟でいろいろお話を伺っていると、意外というのか、大手の企業が協力をされているんですね。例えば郊外型の大きなスーパーマーケットが、震災のその日のうちに広大な駐車場に難民キャンプ用の膨らませるタイプのテントを8張りほど一っ張って、数百人を収容することをなさっている。それから持っている食料や水を全部供出した。これはすぐに調達しようと思っただけではない。つまりあらかじめ持っていたのか、すぐに手に入るルートがあったわけですね。地元の人も「あー、すごいな」という感想を当然もつわけで、「スーパーに行くならあそこに行こう」と間違いなく思うわけです。つね日頃から「そういうことができる」と公表しておく、そして「何かあったらうちに来てください」と言うことで、地域と企業の絆をつくっていきける気がするんですね。

スーパーマーケットのような客商売は人が来るのは歓迎ですからいいんですが、では工場などの場合はどうか。実は神奈川県で我々は、臨海部という、かつての重厚長大型産業の京浜コンビナートの巨大な工場の跡地を中心に何かテーマを探しているんです。非常に広大な土地を持った工場などは、災害が発生すると基本的には閉鎖するわけですね。もし中で火事が発生しても、「自分たちで火事を消すから、街の消防は入ってこなくても結構です」とガードする。しかしその門を開けることも必要だと思うんです。そして避難所に使ってもらう、あるいはそこを情報のハブにするなど、いろんな役割を持てると思います。新潟でも、対応は多少スーパーに遅れましたが、大手の電機メーカーが電子機器工場のスペースを貸して、いろいろやってくれていたようです。そんなふうにと考えると、平常時からそういうことができたならもっといいだろうなあと思うわけです。

今日は企業の方も来られているようですので、そのあたりのことも伺ってみたいと思います。企業にとっての「市民としての証」。防災のような、共通の利害が一致するところで役割を果たしていくということは、非常にいいことであると私は思います。また先ほど自販機のメーカーの事例がかなり進んでいると伺いました。しかしそういう情報を我々はほとんど知らされていないわけですね。街中に蔓延している、というふうにはしか認識してこなかった自販機が、情報の定点観測の拠点になっていたり、災害時のアクセスポイントになるということはとてもいい。昔であれば街角のたばこ屋さんだったはずで、その方がむしろおばあちゃんがいて良かったかもしれない。でも「耳が聞こえないと困るしなあ」とか、いろいろ考えますが。

高木（客席から）：私はいま島津製作所に所属していますが、元々は役所におりました。以前にいろいろな防災に関わった経験があり、本日のテーマに大変関心があり来てみました。防災に対応するにはソフトとハードがあって、先ほどお話に出た流通の問題などはどちらかというとソフトで相当カバーされていますね。これは私の思い込みなので聞き流していただいてもいいのですが、最近「ピフォー・アフター」という家のリフォームのテレビ番組を興味深く見ているんですね。椅子だと思っていたものが、いつの間にか机になったり、壁にへばりついていたものをぱたんとやると居室

に変わったり。例えばトイレの話などもそうですが、日頃は普通のテーブルや椅子で使っているものが、いざとなったらビニールと組み合わせれば、1日、2日くらいしのげるトイレに変えられるんだ、そのようなことですね。汎用品を使えるというのが理想なのかなあと思いました。世間の人はいつも防災リュックを背負っているような生活は嫌だと思っんです。ですからあまり世間に負荷をかけずに、防災に、最近は「減災」と言っているようですが、どう対応するのかということが非常に大切なんだろうと。

それから緊急時の対応として、コンビニや自動販売機の話をお伺いしましたが、私もかつて関わったときにはいろいろ使い方あると思ってやっていました。例えば原子力防災、「ヨウ素」を飲んで被爆を防ぐということも、最初1日か2日分だけの分を持っていければいいかというように考えるんですね。2日あれば、その間に日本中から集められるだろうと。そういうようなソフトで相当カバーできる。そのあたりにいろいろ知恵を使っていけるんじゃないかと思いました。それから聞いた話ですが、山古志村では、緊急時の情報の連絡が一番困ったという経験から、無人飛行機を使ってとにかく連絡だけはとれるようにしようといま考えているようです。

船曳（客席から）：東京デザインセンターの船曳と申します。地震起こったあとで我々がどういう生活用具を必要とするか、それを見せていただいたんですが、私が一番感激しましたのは、最後に益田文和さんがお召しになった「私これできますジャケット」です。こういうことが起こったときに一番問題となるのは、それぞれの人の力というのか、とりわけ都心部、都会部では隣人がどういう人間かわかっていないわけですから、お互いが頼れる人間になるためには、自分の能力にこういうことがありますよということを人に知らせる、これはすごく重要だと思っんですね。CSR、それぞれの企業の中において、いざ災害が起こったときにそれぞれの人間がどれだけの能力を発揮できるのかということをやってみてはどうか。企業としてまとめれば、結果として、集団としてこういうことができる、組織としてできるということも出てくるような気がします。まずは一人一人がそのとき、その場に立ち会ったときに何ができるのかということを考えてみるのが大切であると感じました。

益田：人の能力は自分でもわからないことが多いですが、人にわかってもらうことが大切であると考えて、学生とワークショップを行ってみました。そこでは、いろんな職業を書いたカードを裏返しておいて、それをピックアップして、さあ地震が起きたときに自分が何ができるかを考えるわけです。例えばタクシーの運転手をやっていたら何ができるか、コンビニエンスストアの店員だったらまず何をするか、何ができるかとか、そういうシミュレーションです。能力に気付くことも重要だし、それを伝えるということはさらに重要なことじゃないかと思っんです。我々は都会を想定して考えていますが、そこで起こり得るすべてにキャッチアップできないですけども、混乱した中で重要なのはやはりコミュニケーションではないか。

定村：先ほど、島津製作所の高木さんがおっしゃっていましたが、デザインの力、ですよね。今回我々のプロジェクトでデザインのコンセプトに据えた「備蓄」ということだと思うんです。普段は何かに使えて、緊急時にはこういうふうに変用できる、もしくはこういうふうに機能が付加される。緊急時専用で作ってしまうと、結局のところ使わない、しいては作らない。僕も避難用リュックサックを家族一人ずつつくって枕元に置いていました。でもうっとおしいから押し入れに入れてしまっていた。そして地震のときに、あれどこに入れたっけ？覚えてないんですね。それが現実です。ですから普段はきちんと何かで活用できていて、もしくはきれいに壁に収まっているとか、とにかく美しい。そういうことを考えなくてはだめだと思うんですね。

益田：ありがとうございます。「ユニバーサルデザイン」はある意味で定着してきているわけですが、今日のさまざまな発表を通して、いわゆる「共用品」が持っている力をあらためて感じたわけです。ユニバーサルデザインも少し広げて解釈すれば、まさにそういうことじゃないかと。同じ人間でも、状況が変わるとまったく使えなかったり、逆に必要になってきたり、ということが出てくるわけですが、ここにユニバーサルデザインの専門家がお一人おられます。細山さんどうでしょう。

細山（客席から）：松下電器の細山です。企業として何か意見を求められるとちょっと思いつかないんですが、今日のお話を聞いていての感想です。日本ではいま地震が始まったわけではないんですよ。過去何千年も前から我々の祖先は地震とともに暮らしてきた。災害を受けて、その度にいろんな形でそれを乗り越えて、我々がここに存在しているわけなんです。そのときに、おそらく何かのヒントがこれまでの歴史の中に残されていた。もちろん「都市」というのは過去になかった形態です。これだけ大きな広がりの中で人間が存在しているというのは過去になかったと思うんですけれどもね。もっともっと小さなコミュニティの中で生活していたんでしょうから、条件がだいぶ違うでしょう。しかしいずれにしてもどこかに何かのヒントがまだまだあるんじゃないのかなあ。今日のお話を聞いていて、そんなことも思いました。いっぽうで、これまでの日本の文化の中から、あるいはお互いの連携の中から、何かヒントが見つかるんじゃないか。それを現在の情報社会の中でどう生かしていくのか。また違った、意外な解決方法が出てくるのかなと思いますね。

ユニバーサルデザインをずっとやっていていつも思うことがあります。東京は電車がしょっちゅう止まりますね。その度に「情報弱者」と言われている視覚障害者の方や聴覚障害者の方には、何が起きているのかさっぱりわからない。あるいはどうしていいのかわからないという状況になっています。地震はもちろんこれとはレベルが違うかもしれませんが。そういう状況ひとつ考えてみても、いまの社会の中で情報の必要性、これが非常に重要になってきていると思いますね。我々は情報通信機器をやっていますが、機器をどう生活の中で生かすのかということ考えたときに、地震のような極限的な災害のときのことを考える、あるいは同時に普段のコミュニケーションということが非常に重要であると感じました。

益田：地震になったら一家四人飛び込めば三日暮らしていける大きな冷蔵庫をつくったら売れると思うのですが。

本日はありがとうございました。